

白藍塾オリジナル

2022入試小論文分析&解答のヒント

2022年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 早稲田・スポーツ科学部

近年のスポーツ科学部の課題は変則的で予測不可能だが、今年度の課題もかなり変則的で、意表を突かれる人が多いだろう。

課題の図は、「ヒトの二足走行と四足走行の100m走の世界記録の推移」を示している。まず、そもそも四足走行が世界大会の開かれるような競技として存在していることを知らない人も多いだろう。そのため、課題の意図がつかめなくてとまどう人もいるかもしれない。

図を見てすぐにわかるのは、二足走行（つまり、私たちが知っている一般的な100m走）に比べて、四足走行のタイムはかなり遅いということだ。だが、同時に、二足走行がおよそ100年間で1秒ほどしかタイムを縮めていないのに対し、四足走行はわずか10年程度で3秒ほどタイムを縮めていることにも気づくはずだ。

そのことから、四足走行のタイムがそのまま縮んでいけば、少なくとも2、30年後には二足走行のタイムを抜く可能性があるのではないかと想像することもできる。そうなると、オリンピックの短距離走などでも、四足走行で走る選手が出てくるかもしれない。

ここから考えられるのは、「100m走は二足で走るもの」というのが私たちの単なる思い込みであるように、競技の形態は技術や発想次第で今後いくらでも変わりうるということだろう。スポーツの技術的な進化や発想の転換が、競技のあり方を根本的に変えてしまう可能性もあるわけだ。

書き方としては、第1部で図から読み取れることを簡潔にまとめ、先ほどのような内容を書くといい。もちろんそれだけでは字数は埋まらないので、イエス・ノーの問いの形にして、そのような競技のあり方の変更を認めてよいのかどうかを論じるとよいだろう。

「そうした変化は各々の競技の本質に反する」としてノーの立場で論じることも可能だが、どちらかと言うとイエスの立場に立って、スポーツの多様な可能性を認める方向で論じるほうが、出題者の意図には適うと考えられる。そして、スポーツ科学がそうしたスポーツの可能性の拡大や進化に貢献しうることを論じると、説得力のある内容になるはずだ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>